

受容理論が生まれるまで

轡 田 收

まず初めにお断わりしておかねばならないのですが、本稿は新しい知識をもたらすことを目的とはしておりません。平たく言いますと、「ある文学理論が誕生するまでの物語」です。「物語」はドイツ語で“Geschichte”で歴史という意味もありますから、そのようにとっていただいて、文学の受容理論が成立するまでの前史も含めて、私なりの理解をお話したいと思います。あるいはやや理屈っぽく言いますと、ここで私が明らかにしておきたいと思っておりますのは、およそ学問上の理論が成立するには、その学問の歴史的展開の中での必然性と同時に、社会過程の変化にともなって、研究対象ないしは対象領域の布置(Konstellation)の変化が生じ、学問的な見方も変更せざるをえない、そういった機能史的な見方の試みです。つまり theoria（見ること）が変革するのは、その学問〔科学〕内の歴史的必然性ばかりではなく、時代状況の文脈も読む必要があるのではないか、と考えているからです。

この論考は、受容美学(Rezeptionsästhetik)として出現した文学の受容理論が広く注目を浴びるようになった 80 年代の初め頃に行った講演や、84 年秋に金沢で行われた日本独文学会のシンポジウム「1968 年以降の西ドイツの文学と社会」の基調報告をもとにしています。ゲルマニスティク研究史は 90 年代になってようやく形を整えてきましたが、日本ではまだ手が着けられていない状態ですので、かつての報告をそのまま「研究ノー

ト」として提出しようと思ったのですが、読み返してみますと、今日の認識から補正ないし説明を加えるべきところが多々目につきましたので、「ノート」どころではない、長いおしゃべりになってしまいました。おそらく学生諸君には研究史へのガイドとして多少参考になるかと思います。

1960年代の問題ということが、まず初めに考えられます。一般的な時代状況からいうと、1950年代が「非政治的」な時代であるのに対して、1960年代は「政治的」な時代であるということがいわれています。この50年代は、49年にアデナウアーが首相になって、63年に退陣するいわゆるアデナウアー体制の時期に当たるわけで、日本よりも遙かに壊滅的な敗戦を迎えていたドイツを復興させ、しかも繁栄を招いた「経済の奇跡」で知られています。20世紀も終わりに近づいた今日、経済の力は単に経済の領域だけではなく、その波及効果は、人々の感じ方や考え方にまで浸透することがさまざまな面で明らかとなっていますが、あの敗戦後の荒廃の中にあっては、まずは経済の復興が至上命令であって、豊かさを目指すことは善であり、そこには負の価値を見るよすがもなかったのです。惨憺たる近代戦が起こされ、悲惨な敗戦を迎えても、政治や経済のシステムの手直しこそ＜民主主義的＞という指標の下に大規模に行われはしたものの、戦争を起こしたその根元、19世紀から特別の反省も加えられずに容認されてきた国家観の根本にある考え方、思想への問い直しは、戦勝国敗戦国を問わずに、ほとんど行われていなかったのです。つまり、価値観や知のパラダイムは19世紀のままに継続していたといえるでしょう。

さて、60年代に入ってからの変化について、まず文学の出来事を見ますと、それまで、ノサック Hans Erich Nossack, ベル Heinrich Böll, グラス Günter Grassらがフィクションの手法でナチズム時代の過去と対決し、またその過去への反省が欠如した現状を批判し異議を唱えていたのとは違った局面が展開してきました。戦争責任そのものを主題としたドキュメンタリ様式の登場です。1963年から64年にかけてホーホフト Rolf

Hochhuth の『神の代理人』*Der Stellvertreter* は、ローマ教皇に対する戦争責任を問うたもので、非常にセンセーショナルな作品でした。それまで文学作品において、そのような政治的な問題を直接提起することはなかったのですが、ホーホフートは、まず60年代初期において火をつけたということがいえるし、またそういわれています。さらに同じような現象を追ってみると、ペーター・ヴァイス Peter Weiss の『追究』*Die Ermittlung* があります。ナチの強制収容所において多数のユダヤ人が殺害されていたが、そのような殺害に関わったかつてのアウシュヴィッツ収容所職員 18 人に対して行なわれたフランクフルト裁判(1963-65)を舞台化したもので、これが 1965 年。前年の 64 年には、キップハルト Heinar Kipphardt の同じく戯曲『オッペンハイマー事件』*In der Sache J. Robert Oppenheimer*, そしてギュンター・グラスは、1965 年と 69 年とのドイツ連邦議会選挙のときに、ヴィリー・ブランツ率いるところの SPD 社会民主党の支持者として、各地を巡り歩くと同時に、政治を論じた講演を 65 年の *Dich singe ich, Demokratie* のように本の形で発表しています。このような動きがありました。以上は文学および文学を通じて社会運動が起きていたという、ほんの一例です。

政治と社会の動きを簡単に見ておきますと、いわゆる「経済の奇跡」が終息期に入るとともに、在来の社会システムおよび制度が疑問視され始めます。1963 年にアデナウアー退陣（エーアハルトに交替）、66 年には CDU/CSU と SPD の大連立、他方同じ年には APO[アポ]という当時は辞書になかった＜新語＞を生み出す状況が出現します。これは本来保守党に反民主主義的な動向が生じたとき、社民党がチェック機構として働くことを期待していた学生集団が、アメリカのベトナム戦争支援を約束した大連立に抗議し、反対するところから生じた *Außerparlamentarische Opposition* 議会外反体制・野党の略語です。政治を職業的な政党政治家には任せとけないという、学生中心の政治運動が盛り上がってきて、折しも、「パリ五月革命」の政治風土もあり、67 年 6 月のパーレヴィ、イラン国王

夫妻の西ベルリン訪問に対する抗議デモ、その時に起きた学生オーネゾルク射殺事件を経て、67/8年の、いわゆる「学生の蜂起・反乱」へと続いていきました。政治、社会の地図が塗り替えられることになりました。

ところで最初に文学の実践の方を見ましたが、では文学を扱う学問の方はどうだったでしょうか。直接われわれに関係のある文学の研究では、60年代半ばから徐々に変化が生じてきましたが、1945年の敗戦以来、主流はほぼそのまま継続していたのです。

ドイツでは19世紀に学問科学の厳密な規定をし始めて以来、文学研究も *Literaturwissenschaft* という学問領域の中におかれています。*Wissenschaft* という語は、もともと<知識>といった意味でしたが、18世紀末から19世紀初頭のいわゆるドイツ観念論の時代に、哲学を基礎学として新人文主義と手を組んだ学問全体の構築が始まってから、研究対象ごとに特定の確実な方法に基づいた区分がなされて<学問>、そしてやがては物理学を規範とする<科学、サイエンス>という概念になりました。その意味でも、また大学での学科としても、文学がそこに加わったのは、比較的遅いのですが、古典文献学 *klassische Philologie* が新設のベルリン大学(1810)で初めから学科をなしていたのよりかなり後に大学での研究領域とされたときには、*Literaturwissenschaft* と文学の<学>の名称がついていたのです。文字通りに訳せば、「文学学ないし文学科学」となるのですが、日本語に定着していないので、多くの場合、この訳語に「文学研究」を当てざるをえません。ついでながらかつて用いられていた「文芸学」は今や死語に近いでしょう。

60年代に至るまでのドイツ文学研究においては、チューリヒ大学のエーミール・シュタイガー Emil Staiger(1908-87)や、ゲッティンゲン大学のヴォルフガング・カイザー Wolfgang Kayser(1906 -60)らが主流を占めていました。この二人の研究方法を総称して、よく誤って「解釈学派」といわれていますが、正しくは「解釈派」*Interpretationsschule* とよばれるべきと

ころです。もっとも、あとで触れますように、この名称もすでに必要のないところですが。

先ずシュタイガーは、文学研究の核心を作品そのものの解釈におき、作品が整合性をもっているかどうか、すなわち、まとまりをもっているかどうか、そこから考えていくべきであって、その他の文学外の要素によりかかって解釈すべきではない、と主張しました。これは最初、『詩人の想像力としての時間』*Die Zeit als Einbildungskraft des Dichters*(1939)という研究書の序論（「文学研究の課題および対象について」*Von der Aufgabe und Gegenständen der Literaturwissenschaft*）で述べられ、のちには『解釈の技法』*Die Kunst der Interpretation* (1955)という本の同名の論文に説かれています。この論議の出発点は、それまでドイツ文学研究の主流をなしていたシェーラー Wilhelm Scherer(1841-1886)に淵源をもつとされる「Erlebtes, Erlerntes, Ererbtes」(体験、習得、継承)の3要素を研究対象にすることへの批判にありました。シェーラー自身は感覚的、情緒的な研究態度を脱し、学問的な比較評価に耐える方法をもつべく、当時の実証主義的な研究法に範をとって、いわば客観的事実を究明することを文学の研究においても重視しようという立場からこの3要素を導出したのでした。

私がここで説明に用いたいいくつかの概念〈実証主義的研究法 *positivistische Methode*〉、〈客観的事実 *objektive Tatsachen*〉、〈学問的 *wissenschaftlich*〉といったことも、研究史において、きわめて大きな役割を果たしていますので、本来ならばそれぞれの概念の認識関心とその連関について言及しなければ、シェーラーが研究史において占める位置、そしてシュタイガーが批判を行った重みが十分説明できないのですが、ここでは残念ながら省略せざるをえません。

シュタイガーは、シェーラー的な文学史アプローチは、「文学的要素 (*das Dichterische*)を社会や、政治状況、文化的諸関係等々から説明する」ものであって、文学本来の研究とはいえない、文学研究は文学現象を「説明することではなく、記述すること」に課題がある、と説いたのです。作

品がどのようにして書かれたのかとか、作品と時代との関係はどうであったのか、という問いの立て方は、文学にとっては外在的な問題設定だという考えです。

シュタイガーは、文学研究の自律性を強調して、「文学史家にとって重要であるのは、詩人の言葉、言葉そのもの、その背後や、上や、下にあるものなどではない。[…] われわれが直接芸術に接してえられる印象が開き示してくれるものこそが、文学研究の対象である。すなわち、われわれの心をとらえるものを把握すること *wir begreifen, was uns ergreift* が、あらゆる文学研究本来の目的である」と述べています。

シュタイガーの主張は、作品のどこが、何が、どのようにわれわれを感動させるのか、それを記述せよ、というわけです。それは「個々の芸術作品を入念に記述すること」であり、この作業を彼は規定して、「学問的な記述をわれわれは解釈*Auslegung*と呼ぶ。したがって、われわれは文学を解釈するのである」と言います。のちの言い方、*Interpretation*と違い、*Auslegung*という語が用いられるところは、ハイデガーの影響が感じられるのですが、まさにそのようで、学問的解釈の源流として、シュライアーマッハーを挙げ、ディルタイによる仲介を範例とし、ついで、この系列で問題になっていた、解釈にともなう、あるいは解釈の根底をなす「解釈学的循環」を積極的に肯定して取り入れるために、ハイデガーが援用されているのです。—「解釈学的循環*hermeneutischer Zirkel*」というのは、解釈に際して、たとえばあるテキストを取り上げる場合、部分の意味はその箇所だけで確定できるわけではなく、おぼろげながら全体を予測して、おそらくこのような意味であろう、と意味の方向を考えることによって、部分の意味を解釈し確定していきます。それと同時に、あらかじめもっていた全体への予測を、全体の中での部分の意味に基づいて修正するということを繰り返しながら進行し、全体を読み上げたとき、それまでの個々の部分と全体との相互関係が明らかになるとともに、作品全体の意味

も鮮明になってくる。＜全体は個から、個は全体から理解できる＞ようになるという循環のことです。それなら、勤が頼りであって、個人差があり、認識に至る学的根拠は曖昧じゃないか、というところから、「悪循環」*circulus vitiosus*となされていたのを断ち切ったのが、ハイデガーというわけです。－

すなわち、ハイデガーはこの「循環」の中に、「現存在の実存論的な先構造」を見いだし、「この循環を誤謬(vitiosum)といった低い評価をしてはならない。その中には、根源的な認識を可能にする肯定的な要素が隠されており、その可能性を正しく捉えるのは、当然のことながら、解釈とは、その最初にして、不変で、究極の課題が、[...] 事象そのものから仕上げを行うことによって、学的主題を確実にすることにある、ということが理解されている場合のみである」(SuZ,153)と言っているのを引いています。シュタイガーの言いたいのは－ハイデガーの基礎存在論という確固たる思考基盤をもっているのだぞ、という基底音はもちろん－「事象そのものから *aus den Sachen selbst*」にあります。ハイデガーはもちろん、フッサールの現象学の影響も感じられる言葉遣いですが－事実、シュタイガーはこの網領的な論文の結びで、自分の態度表明に、これは「全く文学史ではない、せいぜいのところ文学の現象学だといわれるかも知れないが」、問題は名称ではなく、学問遂行の正しさにあるというところで、むしろ自ら推測させる向きもあったのですが、文学の学問研究ですら、ドイツの問題設定とリンクして、イデオロギー的偏向していた時期にあって、作品そのものをないがしろにして、一見文学を論じるようでありながら、じつはその目標は＜特殊ドイツ＞の現象を際立たせるところにあるといった傾向へ、中立国スイスから発信された批判と聞き取れるところです。しかし、非政治的、非イデオロギー的な理論でありながら、その動機は、政治的な理由であったことが60年近くのにわかるのです。[後段の「チューリヒ文学論争」の箇所参照]

今日の目からすると、このように解釈の立場を鮮明にしたのは、十分注

目に値しますし、またそれと同時に解釈の対象となるテキストおよび言語をいかに捉えるかという、のちにテキスト言語学や解釈学で論じられる問題、また文学史研究の一環である限りはどのように文学の〈歴史〉を捉えるかという問題に結びついて展開すべきであったのですが、シュタイガーの主張は45年以降までゲルマニスティクの注目を引くところとはなりませんでした。

もうひとりのカイザーはどうかというと、この人は戦時中、リスボン大学にいた人です。そして1950年、ドイツ文学研究の中心のひとつといわれている、あるいは、いわれていたゲッティンゲン大学に呼び戻されました。それは彼がポルトガルでの研究成果をまとめた『言語芸術作品』*Das sprachliche Kunstwerk*(1948)がうけた評価によるところと見られます。カイザーは必ずしもナチ時代の本国ゲルマニスティクと無縁であったわけではないのです—1936年の教授資格審査論文である『ドイツ・バラードの歴史』*Geschichte der deutschen Ballade*は時代の傾向から免れていませんし、カイザー自身戦後の文献では引用、言及をさけていました—が、異国にあって、17世紀以降の文学作品を読み解く作業に従事している間に、文学的テキストの解説、解釈の手続きを考案したと考えられます。その表題が『言語芸術作品』というだけあって、彼の見解もはっきりしており、文学の自律性を前提に、研究対象を純文学*に限るのです。そして、文学テキスト—このような表現も日本では70年代半ばから定着したのですが、趣旨からいって今は言語に関わることなのでテキストという言い方もとりま—を読み解くためのアプローチを階梯的に叙述してゆきます。文学作品の構成を解きほいてゆく分析方法が開陳されるわけで、どのような筋道をたどればその作品の構成を記述し、特色をつかむことができるかということをしきりに実例を挙げて説明しています。従って、実践的な方法を入念細密に説明しているのですが、文学に何を求めるのか、あるいは文学研究における認識とは何か、またそれによって何がもたらされるのかという、方法論的認識は明確に示されてはおらず、シュタイガーほどの思想も

ここにはありません。非常に詳しい技術教本といったところで、この本を読んだからといって、必ずしも作品の解釈ができるようになるわけではないが、そのような期待をもたせるものではありませんでした。

* もちろんドイツ語には字義通りにこのような表現はありません。

ここで彼が用いていたのは、18世紀にフランス語の「belles lettres」から借用してきて、今日では死語の「Schöne Literatur」です。本論文では取り上げられないのですが、ドイツ語には文学一般ないし通俗文学を意味する *Literatur* に対して、それこそ純文学ないし高級文学を指す *Dichtung* の区別がかつてはありました。作家の呼び方も、それに応じて、それぞれ *Schriftsteller*（作家ですが、後者との対比では「物書き」）と *Dichter*（詩人）に分けられていたのです。こうした考えに変化が生じたのも60年代中頃の特徴です。つまり1964年、シュトゥットガルト新聞 *Stuttgarter Zeitung* 文芸欄の企画で「文学とはなにか *Was ist Literatur*」という問いかけに、数々の文芸批評家あるいは文学研究者が答えています。そこで確認されたことは「文学」概念の変化拡大であり、*Dichtung*、*Literatur*といった上位下位の差とか区別が成り立たなくなっているという認識であったのです。しかしここによせられた論評ないし論文が編纂されて一巻の書物となったのは1973年のことですから、一般にこうした考えが浸透するまでかなりの年月を要したということになるでしょう。

さて、シュタイガーとカイザーの二人の学問というのは、共通点といえ、先に説明しましたように、作品だけに目を向ける、作品の歴史的社会的連関への関心は希薄であるか、排除されている、ということに尽きます。これは日本的コンテキストで考えれば、審美主義的ということ、何の不思議もないことなのですが、先にも少々触れたように、ゲルマニスティクでの研究の歴史を背景にとると、きわめて特異な態度です。そこでどの程度の偏差が生じたのかを考えてみようと思います。

非常な曲解や誤解もあるのですが、ゲルマニスティクの成立をたどる

と、どうしてもドイツの精神科学の大立者でありまた中興の祖であった
ヴィルヘルム・ディルタイ Wilhelm Dilthey が唱えた精神史的方法、ある
いはディルタイは精神科学 Geisteswissenschaft という名称を広めた人
ですが精神科学そのものに行き着かざるをえません。そこでは、まさに歴
史が中心問題になってきて、在来に行き方だと、ドイツ精神の発現ないし
成果を取り上げざるをえないのです。ここで話をあまり難しくはしたくな
いのですが、いくらか正確に考えておくために、ディルタイの言うところ
を見ておきたいと思います。

ディルタイの精神科学の根幹は、「生の連関 Lebenszusammenhänge」に
あります。それに関して、彼は次のように述べています。

「生に出発点を取り、生と絶えず連関をもっていることが、精神科学の
構造の第一基本特性を形作っている。精神科学は、体験、理解、生の経験
を基盤としているからである。生と精神科学が相互にとってこの直接
の関係は、生の諸傾向とこの〔精神〕科学の科学的目標との間の対立をも
たらす。歴史家、国民経済学者、国法学者、宗教研究者は、生のうちにあ
りながら、この生に影響を及ぼそうとする。彼らは、歴史的人物、大衆運
動、さまざまな思想方向に自分の判断を下すが、この判断は、彼らの個
性、彼らが帰属する国家、彼らが生きている時代によって制約されてい
る。彼らが、無前提に問題を扱っていると信じている場合ですら、彼ら
は、こうした彼ら自身の視界に規定されている。ある過去の世代の諸概念
について企てられるどのような分析にしても、これらの概念には、時代の
諸前提から生じた構成要素が含まれていることを示すからである。」(GS
VII, 137)

ここでは「時代の制約」ということに注目したいと思います。思考の展
開の仕方というのは厄介なもので、本来ならばここで理論的認識の制約の
問題を捉えて、認識は絶対的なものではなく、必ず認識関心 Erkenntnisinteresse、つまり、認識を導く関心があり、一定の認識がえられたと
き、反省的に、その認識にはどのような関心がもとなつて到達したのか

と、フィードバックを行い、その認識を相対化してみるという確かさを検証する手続きが求められるはずです。ですから、あっさりと「時代の諸前提から生じている」と言い切るのは、ほかにはとるべき立場がないみたいなのですが、学問的・理論的判断であるならば、逆にその「時代の諸前提」なるものが果たしてどのような性格のものか、またどうして生じてきたのかを明確にしなければならないでしょう。従ってここでのディルタイの論理の進行は短絡的です。あるいは、先を急いでいたのでしょうか。今日のわれわれとしては、この点からディルタイの考えるところを、精神科学の目標は時代が、そして国家が求めていることを明示することにならざるをえない、という風に読めてしまうのです。そして、このあたりは、精神科学の認識関心が究明されていたというよりも、むしろディルタイ自身の認識のあり方を思わず示してしまったと読みたくなります。ことに1866年の普墺（プロイセン・オーストリア）戦争の時期を迎えたときに、若いディルタイ（1833年生まれ）の考えの中には、プロイセンによるドイツ国家をどのように精神的に下支えをするかといった傾向が見られ、その起点とも見なされるのが1867年のバーゼル大学教授就任講義「ドイツにおける文学および哲学の運動、1770-1800」*Die dichterische und philosophische Bewegung in Deutschland 1770 bis 1800* です。「一連の恒常的な歴史の条件に基づいて、ドイツでは前世紀最後の3分の1世紀に、ひとつの精神運動が生じた。それは完結した連続的な過程をたどりながら、レッシングからシュライアーマッハーおよびヘーゲルの死に至るまで、ひとつのまとまりをなしている」というのがテーマですが、ディルタイはこの時代に、特殊ドイツの性格を見るのです。イギリスやスペインで、強力な国民国家を背景に、文学の最盛期が展開したのと異なり、ドイツでは国民的統一はなく、市民は政治の領域から閉め出されていた。それゆえに、ドイツの文化は全く別個な形態をとることになった。こうして中間層は「生の衝動の全体、すべてのエネルギーを、彼らの力がもっとも成熟した年代になって、内面に向ける。こうして、個人の教養・人格形成、精神の勲章が彼らの理

想となる。』(V,15)こうした観点から、政治の世界に代わるのが文学だ、と捉えられています。

こうした考え方は、なにもディルタイが最初ではなく、すでに19世紀でも30年代に歴史家ゲルヴィーヌス Georg Gottfried Gervinus(1805-1871)が著した、ドイツでは最初の学術的文学史通史『ドイツ人の詩的国民文学の歴史』*Geschichte der poetischen National-Literatur der Deutschen*(1835-42)全5巻に見られます。彼の動機は、文学の歴史を通じて国民の形成史を描くことだったのです。つまり、領邦国家であったドイツには一貫した政治の歴史がないために、それぞれの時代の政治的社会的状態がいかに文学と結びついていたかを確認することによって、国民の歴史としたのです。ただし、ゲルヴィーヌスは三月前期の文学者と同じに、ヘーゲルとゲーテの死をもって「芸術時代の終焉」とみなし、新たな時代の始まりに向けての「行動」のプログラムをいかに組むべきかを考えていました。「私は学問の道をたどって、政治的生活の準備を進めようと思った」というわけです。このようにして、ゲルヴィーヌス以後、自由主義の歴史家たちは、ワイマル古典派とその時代、さらにドイツ観念論の時代を、ドイツ国民が本来構想すべきであった政治的課題に無縁な高踏の静寂主義と見なしました。従って、文学の歴史の捉え方は共通していながらも、ディルタイにおいてはその意味づけが、いわば逆転したわけです。

このようにして、ディルタイをもって、文学は観念論哲学を根幹とする精神史の中で、きわめて重要な位置を与えられることになります。文学は精神をもっとも分かりやすい表現で、ということは、個別を通じて普遍的なものを示すと考えられたからです。先の「内面に向かう」ということは、否定的に評価されず、むしろ国民的なアイデンティティを示す肯定的な方向で捉えられるところから、そののちドイツ人の国民的特徴ないしは美德とされるようになる「ドイツの内面性」の概念に結晶します。おかしいことですが、一もっと経緯を詳細に見る必要はありますが一文学の研究者による論考よりも、哲学者や思想家の発言の方が文学的評価や文学史の

枠組みを作り上げていくという構図ができています。

いずれにしても、ディルタイを契機として、ゲーテ、シラーを頂点と考
え、それまでどちらかというとな否定的に見られる傾向のあったロマン派に
も「ドイツ運動」の高まりという評価を与えるドイツ文学史のカノン形成
が行われました。

ディルタイは「われわれ国民に対して、その教養形成、言語形成を行な
い、支配的な世界観、数多くの理念を与えてきた偉大な人物たち」を文学
史で研究すべきだとも言います。ゲーテを初めとする「きわめて偉大な詩
人たち」は、常人のおよばぬ生の内奥、根元の体験を言語化していること
によって、「生の理解を開示」し、追体験を可能にする導師として重要視
されるのです。今ではまさかと思われるでしょうが、ディルタイはそうし
た見習うべき偉大さの対極にハイネをおきます。「その時代の破壊的な力
の中でも強大な動力であり、文化史の一現象ではありえても、国民の不変
の財産には加えられない」と、ドイツ国民文学史からハイネを抹殺せよと
さえいっています。

そして、ディルタイは、先の引用でも明らかなように、精神科学を実践
的な関心から基礎づけていますが、実践的な生の連関とそれを学問的科学
的に客観化するモデルを、生活誌、いわゆる伝記にとっています。そこで
は体験とその客観化(Objektivierung)が例示されているからです。文学作品
はそうした関心にとってまさに格好なわけで、ディルタイは近代ドイツ最
初の重要な詩人として再評価したレッシングを初め、当時まで異端者扱い
をされていたヘルダーリン、ノヴァーリス、そしてもちろんゲーテ等々を
解釈学的関心から読み解いて行きました。それらを一卷にまとめたのが
1905 年の *Das Erlebnis und die Dichtung* 『体験と詩』です。そこでも述べ
られているように、詩文学は「個別の事態」を描きながらも「普遍的なこ
と」に満ちており、いずれの文学作品も「対象を現実の生の連関から引き
離して、全体像(Totalität)を与えている」という関心から文学を見ていま
す。ですから、本来の作品解釈とは、立場や視点が違うはずなのですが、

文学研究者の〈学術的〉な論文の書き方—ディスコース—とは異なる生の哲学の、エッセーが成立しました。つまり、実証主義的な文学史研究での記述はまさしく論究であって、科学的客観主義の特徴として、書き手の個が記述から消去されているだけに、〈事実〉の確からしさはあっても、読み物としての魅力に欠けていました。その点、ディルタイは多くの文章を読書人向けの雑誌に寄稿していたことだけあって、必ずしも透明な文章ではないにしても、理論に裏付けられた「感情移入」、「心的生活の全体を理解において活性化する最高の方法である追体験」の叙述は、かつて敬虔主義が生んだ信仰告白の書、あるいはトマス・ア・ケンピスのように、論文であるよりは文学作品の示された偉大な魂に学ぶ生の書、エッセーとしての魅力をそなえています。

そうしたこともあって、ディルタイはこの『体験と詩』一卷を通じて文学研究に大きな影響を及ぼすことになりました。それはディルタイにとっても、影響を受けた側にとっても、幸運であったとは言い難いことです。というのは、ディルタイの精神科学論、あるいは「生の哲学」を背景にして詩人論を読むならば、意味するところない意図が構想全体の中で捉えられるはずなのですが、独立した文学研究書としては、あまりに時代の諸条件や社会的連関を捨象した人間論の解釈に陥るからですし、また、その対象が、たとえ作家や詩人であろうとも、文学の問題が論じられるのではなく、文学作品を通じての人間の生が問われているわけで、確かに解釈の手際はすぐれていても、あるいはすぐれているからこそ、芸術作品に対する美的経験は視野に入らず、心理学的、心的な相がクローズアップされて、どこか宗教的な印象さえ生じることがあります。

日本の文学研究の基調も、ディルタイの哲学を抜きにした表面的な解釈による影響を相当うけていたようです。これはここでの論題から外れますので、その詳細は省きますが、まずは、その他の研究法がかつての日本の学問水準には採り入れ難かったという、いわば消去法的な選択によるところ大でしょう。つまりは、一種評論的な論文、論考ならば、見よう見まね

できるといったところです。ディルタイは読まなかった、学ばなかったという人たちも、いわゆるドイツ教養主義と相俟って、結局はそうしたスタイルだけはとっていったようです。

60年代後半の特に「方法の多元論」問題が起きてきた頃に、実証主義はやや一面的に批判にさらされることになるのですが、シェーラー的な実証主義は文学研究の王道であったことはなく、文学史的な形式を整える上での利便を提供していました。いわゆる「生涯と作品」、「人と芸術」といったスタイルです。詩人や作家の出自、生い立ち、環境といったことから作品の解釈をするのは、むしろこの方法を受け入れた日本の方がお家芸的になっています。

しかし、実証主義的な研究がむしろ縁の下の力持ち的に、本文校訂に生かされて行ったことは、忘れるべきことではないでしょう。ですが、この仕事は、少数の歴史批判版編纂者は認められたものの、補助学的な扱いをされていました。研究のための真の基盤はテキスト校訂編纂にあるのですが、それに携わる研究者が学界の表に出る機会が少ないのが、そうした評価に結びついたのだと思われます。かなり古くは、いわゆるワイマル版ゲーテ全集も実証主義的研究なくしては成立しなかったでしょうし、その他、ジャン・パウルのベーレント(Behrend)、フォンターネのシュライナート(Schreinert)の名を挙げておきたいと思います。もちろんゲーデケ(Goedeke)は依然として文学史文献学の代名詞ですが、彼自身はゲッティンゲン大学の員外教授で終わったことはあまり知られていないでしょう。

今世紀20年代から45年まではなんと言っても精神史的研究が主流を占めていました。つまり、第一次世界大戦をはさんで、方法の転換が生じたわけです。これは同時代のさまざまな学問分野の重要度の変化やパラダイム転換と係わりがあると同時に、いわゆるマンタリテに裏打ちされていると考えられます。文学社会学の萌芽や唯物史観的な方法も見られはしたものの、大学における大勢は精神史的方法が主流で、そしてその中で、問題史(Problemgeschichte)であるとか、ドイツ的心情(Seele)の歴史(G.Mül-

ler), 時代精神(H.A.Korff)等々の枝分かれが見られます。精神史的研究が直ちにナチズムの文学研究と手を結ぶわけではないのですが、ディルタイのディスクールをまねた研究者たちは、ディルタイの概念、たとえば「体験 Erlebnis; Erleben」とか「生 Leben」、さらにはフッサールからの「本質直観 Wesensschau」などという言葉を借りて、この時代に特有な、時に曖昧模糊とした文章を発表し、また講演をしていました。かつての分析的、アトミスティックな考察に対置されて、総合的包括的な把握、「全体性 Ganzheit」構想が前面に現れたことも、この時代の特徴でしょう。

さて、敗戦によって、ドイツ文学の学問研究はどのようなになったかを振り返ってみると、まず基本的には変化がなかった、というよりは変化の仕様がなかったのです。

大学の教授の陣容、これは日本でもほとんど同じだったと思われますが、戦時中は教授の任用を行うことはできなかったのです。青年はみな戦場に駆り出され、後進の育成どころではなかった。状況は日本より深刻だったようです。今はフランクフルト大学教授を停年になったヴーテノウ(1927 生)さんなどは、少年兵として高射砲の砲弾運びをさせられたと話していました。ゲルマニストではないのですが、ヴァルター・イェンス(1923)などは特例であったと自分で語っています。つまり、病身であるために、＜やむをえず＞大学に戻ったというのです。

敗戦となり、駐留軍の命令で、＜国策的＞であった教授たちは大学から追放されました。ベルトラム(E.Bertram)、ブリンクマン(Henning Brinkmann)、ツイザルツ(Herbert Cysarz)、フリッケ(G. Fricke)、キンダーマ(Heinz Kindermann)、マルティーニ(Fritz Martini)、ノイマン(Friedrich Neumann)、ポンクス(H.Pongs)、トゥルンツ(E.Trunz)らです。しかし、しばらくすると、おおむねこのページは解けて、大学に復帰してきたのは、講座に穴があいたためとされています。キンダーマンのように明らかにナチ支持者であったのに、以後も演劇学の大御所であり続けた不思議

もありました。また、これらの教授の著書も、相変わらず参考文献に挙げられ、フリッケなどはかなり後までギムナジウム用の文学史の権威でしたし、ポンクスはリルケ研究に不可欠とされていました。その他はそれぞれ実状が異なっており、マルティーニやトゥルンツはいち早く指導的な地歩を占めたのですが、ベルトラムの場合は、名誉回復にだいぶ手間取りました。いずれにしても、研究者たちの戦争責任問題は、60年代になるまで、学界でも大学内部でも起きなかったのです。従って、学説や研究法への問い直しも行われないうままでした。本来ならば、同じ敗戦国である日本とドイツでの一わかれわれの関心からいうと、文学に関する一研究態度や方法についての科学社会学的な比較研究があつて然るべきところなのですが、そこまで至れないのは残念です。

大学での講義、演習にはく断絶>はなかった、と報告されています。相変わらず、中世、古典主義、ロマン主義の題目が並び、ドイツの文化遺産としての『ニーベルンゲン』、『ファウスト』、ノヴァーリス、ヘルダーリンが取り上げられて、不変の意味が読みとられたとのこと。つまり、歴史的、社会的、ましてや政治的文脈にはいっさい触れず、普遍的人間的関心からのアプローチに専念したわけです。そして、1949年。ゲーテ誕生200年祭で仕上げが行われました。文化国家としてのドイツが、全世界に向けて、それまでとは全く異なった、「本来の」、内面に保たれていた顔を見せる絶好の機会に恵まれたのです。スローガンは「Goethe's Germany invites you!」でした。学会、会議、講習会等々が目白押しに開催され、教授、文化人の晴れの舞台が用意されました。

そのころの日本もそうだったのですが、「民主主義」とともに「ヒューマニズム」が戦後復興の謳い文句でした。その旗印の下にあれば、ドイツの文学も文化も、ヨーロッパ人文主義（ヒューマニズム）やキリスト教の伝統を作り、保持してきた「偉大さ」をそなえています。それ以上に、過去の全体主義という抑圧から解放された学生たちに対して、文学は60年代半ばまでは、'Bildung'「教養、人格形成」の主要な機能を果たし続けた

のです。

ところで、文学研究を学問として遂行するためには、当然その根拠付けが要求されるわけで、敗戦を経てみれば、自分たちは全体主義の「犠牲」であったという申し立てが通用し、それに従って、政治的集团的な態度を逃れ、非政治的個人的な思考に転じようとしています。今から見れば、急激な非政治的転換をするよりも、第三帝国時代に偏向した問題点を明らかにして＜浄化＞をはかるのが筋ではありますが、先に挙げた以外に後々まで有名教授として君臨していた研究者*は、過去の業績が人知れず葬り去られることを願っていたために、大学内での反省や批判、あるいは清算の動きは生じようもなかったのです。こうして、40年代の終わりから50年代前半にかけて、いくつかの傾向が顕著となるのですが、そのうちもっとも有力であったのが、実存哲学を下敷きとした立場です。すでにハイデガーが33年フライブルク大学学長に就任した際の講演「ドイツの大学の自己主張」を巡る批判は出ていたものの、むしろ大勢の信奉者や弟子がいたせいもあって、人気の方がいやまさっていたのでした。

ちなみに、ハイデガーはその学長就任のかどで、47年に教授資格を剥奪されますが、50年には古巣のフライブルク大学に復帰します。このころから、山荘に住むハイデガー「詣で」が盛んであり、日本人の中でも「会ってきた」ということを手柄のように報告しているものが数々あります。そして、メスキルヒの農村に生まれ、山荘に住み、野の道を歩いて思索する、といったことが、都会の日常性に埋没している「マン、ひと」(das Man)の「平均性」を超越した哲人の高邁な姿として賛嘆の対象となっていたのです。歴史的に見ても、ドイツの哲学や文学では都会よりも「田園」を優位におき、知識人も都会の利便に与っていながら、文明より自然を賛美する傾向にありますから、ハイデガーのライフスタイルは「本来性」のあり方として尊崇されたわけです。

* Heinz Otto Burger, Wilhelm Emrich, Firedrich Maurer, Hugo Moser,

Wolfdietrich Rasch, Friedrich Sengle, Benno von Wiese

もともとハイデガーの哲学は、ドイツ語特有のニュアンスをたぐり、語義と紛らわしい意味を重ねるところから構築されていますから、文学の精神的アプローチにとっては何かと有り難みのあるものであったのですが、49年に論集『森の道』*Holzwege* が刊行されるにおよび、強力な影響を与え始めました。6 編中、「芸術作品の起源」、「ニーチェの言葉 <神は死んだ>」、「何のための詩人か」（邦訳：「乏しき時代の詩人」）が特に係わりがあります。中でも、「芸術作品の起源」は、真の芸術作品こそ、隠蔽されている「存在者の存在」を開示するものであり、芸術には、存在者の日常性を突き破り、永遠に開かれた存在に導く「明るみ」があるといった言い方をするとともに、彼特有の概念がちりばめられ、耳目を惹きました。この「明るみ」*Lichtung* なども、本来は森の中で明かりをとる間伐地の意味なのですが、言葉の小暗い森の中に真理を示す一条の光が射し込むといったイメージで、ただでさえ森の好きなドイツ人にはこたえられない感触があったのでしょうか。とにかく、ここでは、芸術ないし芸術作品は、あらゆる歴史的な前提を超越して、存在の神秘的ないし真理を開示する契機であるという解釈が与えられています。

こうした教説は当時の知的世界がまさに求めるところだったのです。というのは、教育面においても 19 世紀的教養主義への復古調の傾向が大きく、文学作品には大きな負荷がかけられていました。「詩人は生の根源への目をもっている。詩人は生の基本構造を捉え、それを純粹に表現する」（Glaser, II, 272）といった考えによる国語教育論が主流だったのです。－「国語」という表現は、日本特有で、ドイツにはありません。教科名は「ドイツ語」です。－そして、文学史教科書の中には、扉絵に泉を掲げ、「泉が象徴するのは、文学 [Literatur ではなく *Dichtung*] が、時代に関わりなく湧きいで、自ずから新たになり、魂の体験に形式を与える源泉」（同上）であるからだと説明してあったそうです。教材は改まるわけではなく、ディルタイ時代のカノンがそのまま継承されます。

前史の説明に入ったために、ずいぶん遠回りをしましたが、こうした時代傾向の中にあって、文学研究の基礎論提供者として、シュタイガーがにわかに脚光を浴びたのです。

彼は、1946年に『詩学の基本概念』*Grundbegriffe der Poetik*を刊行して、その存在を知らしめたのです。スイスの出版社アトランティス Atlantis からであったため、紙も造本も敗戦国のものとは比べようもない立派な印象を与えたことも一役買っていたことでしょう。基本的には、先の39年の論説と同じく、文学研究は人間学 Anthropologie の一環をなすという構想が示され、「基礎詩学 Fundamentalpoetik から哲学的人間学へ文学研究が寄与」を行うと述べています。ついでながら、「基礎詩学」は「基礎存在論」を念頭においていることは明らかです。ここでシュタイガーが展開したのは、『詩人の想像力としての時間』でブレンターノ、ゲーテ、ケラーそれぞれの詩を、「引きさらう時」、「瞬間」、「たゆたう時」を基本として分析した延長であって、古典詩学の3ジャンル、抒情詩、叙事詩、ドラマを理念化し、それぞれの特性を「内化」、「表象」、「緊張」で捉えて、文学作品の構造を記述する試みです。つまり、対象は言語現象に限定されますから、作品の成立も影響、作用も考えない。歴史性も社会的連関もいっさい捨象されてしまうのです。シュタイガーは51年の後書きで強調しています。「今日では、歴史的であるだけの研究の全盛期は過ぎてしまった。果たたび、人間とは何か、という包括的な問いが立てられているのである」。じつはここに完全なトリックが隠されていたのですが、それは長い間指摘されなかったのです。ここで文学というのは何を指すのか、この問いはどこにも見られないのです。前提なく、世界文学があり、永遠で偉大な芸術作品がすでにある、という不思議です。そして「人間とは何か」という問いに対する答えは、文学作品が与えてくれるのではなく、すでに＜普遍的＞人間性という観念があってそれを描いている作品を見つけに行く構図です。いかにどのような人間を、なぜそのように表現したのか、また、せざるをえなかったのかということは問いの外にあります。

じつは、ゲルマニスティクの外では研究の地殻変動が起きていたのです。それは、クルツィウス Ernst Robert Curtius(1886-1956)が48年に世に問うた大著『ヨーロッパ文学とラテン中世』*Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*の主題です。「近代文学史」つまり、言語ごとに成立してきた文学研究で、ゲルマニスティク、ロマニスティク、アングリスティク、スラヴィスティク等々を指しますが、それらは、古典文献学のように、ギリシア、ラテンの文献、歴史、言語知識をもとに研究することをなおざりにしてきた。そのため、言語表現の背後に展開しているはずのヨーロッパ文化の伝統と表象が見えていない、という批判であり、警告です。説明は省きますが、「老人のような少年」という言い回しと意味—クルツィウスはこのような常用表現をトポス (Topos, ギリシャ語で〈場所〉の意味) と名付けました—を知らなければ、たとえばブレンターノの『ゴドヴィ』に出てくる「その若者は軽率なところがあったが、[...]彼の口から老人の厳肅さと経験が聞かれ [...]」は、ただその場だけの叙述と読み過ごしてしまふ、といったことです。全巻562ページ（原著）におよぶ考証の締めくくりに当たる「エピローグ」では、じつに厳しい指摘が聞かれます。「いわゆる〈文芸学〉Literaturwissenschaftも不能であった。安易な構成をこととする〈精神史〉、ドイツでは第一次大戦以後、文学学にとって代わった〈精神史〉は、学問の衰退の一つの兆しであった。」（邦訳，p.558）

今日ならば、言語の歴史性を取り上げるのは常識になっていますが、そうしたことが問題化されない時期がだいぶ続いていたのです。そして、クルツィウスはロマニストであったため、それこそ縄張りの問題で、ずいぶん長い間、論議の対象とならなかったのです。私がクルツィウスを知ったのは、たまたま研究対象が17世紀文学であったため、たぶん当時東大にいたヴァーテノウさんに薦められたからだだと思います（1961年購入とメモしてあります）。ですが、66年から68

年まで留学したとき、当時シェーネ教授を中心にバロック文学研究ではもっとも進んでいたはずのゲッティンゲンであったのに、一度もクルツィウスは話題にならず、性根をすえて読んだのは、帰国後、大学紛争のさなか＜本式の＞学問を求めたときのことでした。

さて、シュタイガーとカイザーは、以上見てきた時代背景を考慮すると、偶然、「それ自身で完結した言語の組み合わせ」(Kayser,5)にだけ関心を集中したのではないことが明らかです。こうしてこの二人は方法論も異にしていたのですが、—というよりは、カイザーには方法はあっても方法論はありませんが—「作品内在解釈 *werkimmanente Interpretation*」という呼び名でくくられることになりました。そして、この立場は、アメリカのニュー・クリティシズムに保証され、また、ウェレクとウォーレンの『文学の理論』*Theory of Literature*(1948;邦訳 54;独訳 68)にも裏付けを見いだし、特に政治的・社会的連関から潔癖でありたいと願う研究者や学生の中から大勢の信奉者をうることになったのです。

この方法は一挙に燎原の火のように広がり、同時に、シュタイガーもカイザーも時の寵児になり、講演の依頼引きも切らずという有様です。カイザーなど、その講演集の *Vortragsreise*(1958)を出版しています。訳せば『講演旅行』で、知らない人はデイヴィッド・ロッジの小説かと思うでしょう。こんな具合ですから、日本でも大流行。もともと、日本には実証主義的な方法が入ってきていましたが、一次資料に手が届かない限り、全うできません。従って、この方法は国文学研究の分野で特殊な展開を遂げていくことになりました。外国文学の畑では、評論的に二次文学を生むか、精神史的な読みとりをすることになり、さらにドイツ文学研究ではナチズムの文化政策に乗る傾向が強かったので、敗戦後は手をこまねいていたのです。そうした状態にあって、内在解釈法は救いの神といったところでした。ですから、一時期は、例の「われわれの心をとらえるものを把握すること *wir begreifen, was uns ergreift*」がほとんど合い言葉みたいになっていま

した。「心をとらえる」ergreifenはカイザーでは「感激Begeisterung」という言い方をしています。月雪花の感覚には泣かせどころです。ところで、この命題の〈われわれ〉は規定されません。ということは、〈われわれ〉とはいうものの、それは個からなる集合ではなく、誰でもであり、普遍的な人間であって、スイス人であろうと、ドイツ人であろうと日本人であろうといいはずの共通の人間が措定されているのです—もともと、シュタイガーは日本人まで考慮したとは考えられません—。つまり、前提におかれているのは、文学作品は、というよりも、偉大な文学作品は、誰が、いつ、どこで読んでも同じ感動、感激を呼び起こすものである、という考えです。とはいっても、この解釈法が広まるにつれ、シュタイガーは条件をつけます。「われわれが問題にしている学問が、感情、すなわち、文学に対する直接的な感覚に基づくのであれば、第一に重要なのは、だれもが文学史家たりうるのではない。」これは繁りがおかしいが、聞きましょう。「才能が要求されるのである。すなわち学問的な能力のほかに、豊かで感受性に富んだ心、この上なくさまざまな音色を出す […] 心情が [要求され]、いかなる学者といえども、同時に熱心な愛好家であり、素直な愛をもってことに当たり、彼の行為のすべてに対象への畏敬の念がともなっていることが要求される」と論ずのです（「解釈の方法」(1951)）。もうわかるでしょうが、解釈者は、〈われわれ〉ではなく、作品と一般の〈われわれ〉の間に立って、普通なら「心がとらえ」られないかも知れないところを、教え導く立場の人、ということになります。神と信徒の間で仲立ちをする聖職者のように。

同じ年に、カイザーの方は「文学の評価と解釈」という題の講演をしています。「解釈と評価は作品によって規定されるものであって、解釈者の主観によって規定されるものではない。真の解釈は、私たちが作品を同化するのではなく、作品が私たちを同化するという奇妙な過程から成立してくるものである。」本当に奇妙です。「このばあい解

釈者自身の時代から制約と要請が出るということは解釈学にとっては一つの問題を意味しているが、評価を相対的なものにするのではない。」とはいうものの、どのような「問題」なのか「意味」を解明して見せてはくれません。どうも「評価」が「相対的」に、ということは、「時代の制約」で、評価が変わることのようです。ですから、「偉大な作品が正しく解釈されたという状態もいつかは来るであろう」と慰めるのです（山本明訳による）。語り口は、どう見ても、理論的というよりは、説教に近いのですが、あの当時は、なにか有り難く拝聴という感じだったのです。今ここで＜かつてと今＞を対比している私自身、先の「解釈の方法」を山本さんと並んで、筑摩書房の「世界文学大系」『文学論集』（1965）に訳すことになったのですから。

話が少々細かくなりますが、私たちが教養学部から進学する前の年、1954年の秋にドイツ文学科の先生方と会をもったのですが、その折、シンチンゲル Schinzingler 先生（当時学習院教授、東大講師）に、どのようなものを読んで準備すればよいでしょうかと伺ったところ、カイザーがよいと教えて下さったのです。同席していた私たちの若い先生方はご存じないようでした。シュタイガーの方は、ドイツ留学から帰国早々の手塚富雄教授がヘルダーリン講義で『ドイツ語の傑作』*Meisterwerke deutscher Sprache*⁽²⁴⁸⁾を引用したこともあり、『詩人の想像力』とともどもすぐに手に入れ、＜これが本格的な文学研究か＞と、すっかり参った覚えがあります。そして、4年生になる春休みには『基本概念』を読み上げ、いっばしの研究者になったような気がしたのです。それにこの頃は、今ではすっかり名前も出てこないヨハネス・プファイファー Johannes Pfeiffer の著作があれこれ出回っていて、これがどうも実存哲学の文学研究への通俗的应用にかなり手を貸していたように思われます。プファイファーについては恩義も批判もかなりありますので、項を改めることにして省略します。

文学の作品内在解釈法なるものが出現する経緯については、以上でもま

だ説明不足なのですが、それが主旨ではないので、少し視野を広げて、精神科学ではどのような変化が生じたかを見たいと思います。哲学においては、今日日本でも相当知られるようになったハンス・ゲオルク・ガダマー Hans-Georg Gadamer が『真理と方法—哲学的解釈学の要綱—』*Wahrheit und Methode* を出したのが 1960 年のことです。60 才のガダマーは知名度が高いとはいえない哲学教授だったのですが、それまでの研鑽の成果をまとめて、「真理と方法」という問題のもとに近代思想の歪みを論じたのです。これは発表してすぐに話題となったわけではありません。彼のいた南の方、ハイデルベルクとかテュービンゲンを中心とした辺りで読まれていて、やがてそれが大きな問題として取り上げられるようになったのです。何が問題かという、それこそ解釈学の基本問題なのです。その問題を極めて簡単にいいますと、解釈というのは、解釈する主体を除去することはできない。そしてその主体は歴史の中にある。従って、解釈そのものは歴史性(Geschichtlichkeit)という歴史の拘束を免れることはできない、ということです。ここで解釈の主体が問われることになりました。これはそれまでの精神科学ないし人文科学の基礎づけを大きく変更する動因となります。

なぜそのような問題が出てきたか。これこそドイツの精神科学で非常に画期的な事件でありました。＜真理と方法＞。＜方法＞とは一体何を意味するものか。一般に題名というのは何かを主張しているわけですが、この場合、＜真理＞が肯定的であって、＜方法＞は否定的です。＜方法＞によって＜真理＞が認識できるようになるのであろうか。＜方法＞はそれを習うものすべてが等しく用いることができることから生み出されたのだが、それでは、だれが用いても同じ結果、同じ結論、真理に達することができるのであろうか。はたして近代の学問科学を特徴づけてきた真理と方法の関係を問い直すことが表題の意味です。ここにいう「方法」とはデカルトが提唱したあの『方法序説』(1637)の「方法」です。デカルトは、幼少の時から「書物による学問」、つまり人文学によって育てられたが、こ

れを「手引きとして、人生に有用なことのすべてが、明瞭、確実に認識できると思いこまされ、この学問を学ぶことに熱中した」が、どうも本当に確実な考えをもつどころか、あれやこれやの相反する考え意見、疑問謬見に悩まされることになった。かえって、自分自身で判断する自由をもつ方が、正しい結論に達するように思えてきた、というのです。そこで彼は、幾何学のように、「つねに用いなれた、じつに単純で簡単な、論拠から論拠へ」という連鎖を続ければ、証明にたどり着くから、この方法をとってみればどうかと思い当たり、「もっとも単純な、そしてもっとも一般的なものから始め、こうして発見した真理の一つ一つを、続いて他の真理を発見するための規則として」考えていくと、最後には自分の知らなかった多くの問題さえも解けることを発見した、というところから＜方法＞の至上が始まりました。＜方法＞が基本であり、階梯的に、第一の段階、第二の段階というふうに整然と進行すれば、自然現象は分析し説明できる。それによって法則がえられる。こうした考え方があります。

デカルト以後、とくに19世紀になってから方法が優先されます。学問というものは必ず方法がなければならない。そしてまた法則がえられなければならない、という考え方が強くなり、精神科学も自然科学の影響を強くうけるようになったのです。すなわち *nomologische Wissenschaft*（法則定立的科学）への志向が強くなってきました。

ところで、かつてデルタイは、自然科学が学問としての形を取ってきたのに対して、精神科学も学問化の問題に直面していると考えて、方法的な意識をもって精神科学の基礎づけを行なう努力をした。したがって、ガダマーの立場からすると、デルタイももちろん批判されるべき人です。このように見ると、ガダマーの理論というのはドイツの哲学および精神科学の歴史においては非常に画期的な出来事といわざるをえません。

なぜならば、先ほどいったように、「主体」ということが問題になるからです。実は自然科学的な考え方で行くと、「主体」は一種の悪になる。つまり個人個人がそこに関与したり、あるいは個人の立場が問題になるよ

うでは、客観性がなく、それは学問といえるようなものではないと考えられる。それに対して、精神科学において「主体」が主張されるというのは、一つの反措定になる。ガダマーの提起した問題というのは、従って、理解ないし認識を行なうにあたって、主体およびそれに伴う歴史性を消去できないという問題を巡るものでありました。

ところで、このガダマーの問題提起は次第に反響をよび1965年に第2版が出されるようになります。第2版が出るということは広範に読まれるようになったということも意味します。もちろん哲学畑以外の者も読むようになってきた。ヤウスの受容理論もそうした「作用史」の中から生まれてきたというわけです。

それから、次にもう少し範囲を広げて考えてみると、1961年以降にいわゆる第三次社会科学方法論論争（方法論というのはMethodologie, つまり実際の方法を成り立たせるのはいかなる根拠に基づいているのか、という方法の根拠を論じる学、方法の哲学といった領域です。あるいは、認識はいかにして成り立つのか、そのことを考えるのが方法論）こうした出来事が社会学の分野でひきおこされました。別称、実証主義論争(Positivismusstreit)。これはどのような経緯で起きたかという、これもガダマーが問題にしたのと同じ科学主義がきっかけにある。つまり経験的・分析的な考え方に立っていくと法則が導き出されてくる。そうすると主体は問題にならない。だれが考えようとも、社会事象はひとつの法則性に則っているのだから、観察するのはだれかというのは問題にならない。また分析者がだれであってもかまわない。いやそうではない、そうした科学主義は成り立たない。何といっても見るものの立場、そして対象、学問はすべて歴史の流れの中にあるのに、分析的科学論では、いわゆる社会的「事実」をあたかも自然的事実と同じように見なしてしまう。しかも、それを認識するのは人間主体であるのに、主体の側の社会的拘束が問われていないではないかと反問し、さらに研究とそれが社会の中において果たす機能との関連を不問に付している点を批判します。こうした二つの立場が出て

来たのです。経験的事実を真なるものとして分析し、反証可能な科学を標榜する学問が正当か、あるいは歴史的・弁証法的な立場をとるか、これが社会学方法論論争の主要問題で、1961年から論じられていたのです。のちにアドルノが『ドイツ社会学における実証主義論争』という本に纏めたのが1969年です。この本には両者の論議が編纂されています。そしてこれは同時に論争の鎮静化をも意味しているのです。

鎮静といっても、要するに、お互いに立場が違うのは仕方がないと別れ別れになったようなものですが。科学論的な立場の代表格はポPPERとそのドイツ支部長みたいなハンス・アルベルト、それを批判する側はもちろんアドルノ、それからその系列にある哲学者であり社会学者であるユルゲン・ハーバーマスなどが加わっている。ハーバーマスは経験的・分析的な方法を批判するにあたって、ガダマーに行き当たります。つまり先に触れた解釈学です。ところが、ハーバーマスから見るとガダマーの解釈学はまだ在来の権威というものを批判しきっていない。人間が社会改革を行なって、合意を形成していく過程において、ガダマーは「古典性 *das Klassische*」ないし、それが核となって生じる「伝統 *Tradition*」を導きの星としている。ところが、伝統は、必ずしも全体の合意をもたらす際にプラスに働けばかりとは限らない。つまり強制がその背後に隠されていることも考えられる。というのは、一部のエリートが自分たちの利害だけで—ここには自分では意識していない認識関心も含まれますが—形成して来たものに対して、そうではない大勢のひとたちがひれふせられたという面もある。つまり、意志疎通（コミュニケーション）過程における「歪み」の存在はガダマーの解釈学の中では問題化されていない、というのです。これはもちろん議論を雑駁にいつているのですが、そうした点からハーバーマスは自分の立場、批判理論の立場からガダマーの限界を指摘します。従って60年代の終わりは実証主義論争の鎮静と並行して、同時に解釈学対批判理論の論争が開始しています。

以上がドイツにおける精神状況のいくつかの特徴的な出来事です。その

間、文学研究の方は非常に静かに「作品内在解釈」の旗印のもとに、皆作品のなかに閉じこもって、自分たちの研究領域の外などには目を向けることはしていなかった。ベンノ・フォン・ヴィーゼ Benno von Wiese の監修によって続々と刊行された解釈論集がその代表といえましょう。

他方、研究における関心の変化の徴候も見ることができます。それは 1966 年の Jahrestag des Germanistenverbandes（ゲルマニスト連合年次総会）がミュンヘンで開かれたときのことで、総合テーマは最初「第三帝国におけるゲルマニスティク」と提案されたのですが、「文学と学問におけるナショナリズム Nationalismus in Dichtung und Wissenschaft」に和らげられました。レンマート Lämmert(1924 生)やキリー Killy(1917 生), コンラーディ Conrady(1926 生)そしてポーレンツ v. Polenz(1928 生)といった戦後教授になったひとたちが、ゲルマニスティクの抱えていた基本問題に取り組んだのです。レンマートは「ゲルマニスティクドイツの学問」の題目の下、ゲルマニスティクの偏向は何もナチズムの外圧によって起こされたことではなく、この学科の生い立ちの中にナショナリズムと手を結んでいく素因があったという見解を、例示して行きます。キリーは「ドイツ語読本の歴史について」述べ、歴代の読本が編纂された根底に潜む思想を明るみに出します。「ドイツ文学研究と第三帝国」で、コンラーディはレンマートを敷衍する形で、ナチによって教壇を追われた教授たちでさえ、時代の波に飲み込まれていったさまを報告しました。これらの報告の主旨は、旧悪の暴露などではなく、学問によっては＜象牙の塔＞に閉じこもっているつもりでも、いつしか政治的社会的状況に＜内発的に＞呼応してしまうおそれがある、ということを正面から論じるものです。ですから、本来なら現状への反省と方法論の問題が生じるべきところ、当時の社会傾向と呼応した＜学問の政治化 Politisierung der Wissenschaft＞に乗せられ、やがて 67 年の運動と連結してしまいます。今から見ると、＜政治化＞を加速したのは、あとでシュタイガーに見られるように、批判に対して発せられた旧世代の側からの＜怒り＞の表現だったようです。とにか

く最初にいいました「非政治的」な 50 年代に対する「政治的」な 60 年代という現象が研究の面でも現われてきたといえます。

当時ゲルマニスティク連合会長だったベンノー・フォン・ヴィーゼ (1903 生) は、この集會に反対し、開催後も怒りと不快を公にしたひとりですが、1982 年刊行の自伝でまだ怒っています。さすが文学の歴史家だけあって、夜話なども出てきて面白いのですが、当時ジャーナリズムからすでに攻撃の対象になり始めていたゲルマニスティクを、なおも不利な状態に陥れた下手人ども、といった調子で記した箇所、*「ゲルマニスティクは非政治的であって、それゆえ効果のない解釈をしている象牙の塔に逃げ帰って、自分のおかれた社会的前提の反省をなおざりにしている」*といういわれなき「非難」—であって「批判」ではありません—が浴びせかけられたという件が見られます。問題はまさにここにあったようです。今現在れっきとした学問研究を行っているのに、何が悪い、という思考態度が歴然とあったのです。

ここで扱われた詳細は、今日に至っては、かなり忘れ去られているのですが、ゲルマニスティクにおける研究態度を確認する上で、未処理のままの重要な問題を含んでいます。いずれ、その他の事項と合わせて再考してみたいと思っています。

いずれにしても、「非政治的」な 50 年代に対する「政治的」な 60 年代と社会が変われば、文学の実践そのものも大きく変化してきました。作品の制作の面で、在来考えられていた文学という概念が見る見るうちに打ち破られて行っただけです。つまりそれまでは、文学を考えるにあたっては、その中心にドイツ古典主義を据えて、これは実際にありえたかどうかは分からない「調和 Harmonie」を核とした文学作品が唯一の理想であった。それがまたドイツにおける *Bildungsideal* (教養理想) の目標でもあった。調和はまた「自律性 Autonomie」と結んで近代芸術観の重要な要素をなして、それが 19 世紀以来ずっと支配し続けて来ています。こうした文学観が完全に打ち破られるときが来たのです。

そうした状況に対する不満を声を大にして漏らしたのが例のシュタイガーで、彼が説くところ、メーリケの詩にあるような»selig in ihm selbst«「それそのものの中にあって幸せな」状態、< in sich selbst geschlossen 自分自身の中で纏まりをもつ>のが理想的な優れた文学作品です。そのようなシュタイガーが、チューリヒ市から押しも押されぬ大学者として表彰された1966年12月17日の記念講演「文学と公共性 Literatur und Öffentlichkeit」, やさしくいえば<文学と社会>といったほどのことですが、そういう問題の講演を行ないました。講演は、詩人たるものは公共に対して責任をもつ、その役目は古代より「楽しませ、役に立つ」ことだと前置きして、今日の状態は何だ、と始まります。「参加の文学 Littérature engagée」ということばによく出会うが、「文学 Dichtung を文学として本当に愛好するものにとって不快」なのは、そこには「かつて詩人たちの心を満たしていた共同体への意志の退化 Entartung しか見られない」からだと言うのです。「精神史を知る者、現代を過去に照らして見ることを歴史家の義務とする者にとっては、胸ふさがる情景である」と憤懣を漏らし、「最近の小説や舞台作品の題材を見渡せば、精神病患者、公衆に危険を冒す者、大げさな下品な者、無理矢理ひねり出した卑劣な人間がうじゃうじゃとしている」と罵り、名前こそ挙げないが、明らかにペーター・ヴァイスとわかる劇作家を非難しました。シュタイガーはまさに説教壇から理想の文学を教化したつもりだったのでしょうが、積年の顕彰のはずが、時代を理解しないアナクロニスティックな学者といった老残(?)の姿を晒すことになりました。講演から4日後には旧知のフリッシュが、たまりかねて口火を切りました。「ついにまたもや、退廃文学 entartete Literatur だと言ってもいいことになった」と核心を突いたのです。フリッシュは「意志の退化」で使った Entartung に、かつてナチがとなえた殲滅すべき芸術、「退廃芸術 Entartete Kunst」の用語を嗅ぎつけたのでしょうか。もしもこれを機縁として、シュタイガーの過去をさらうようなことでもあったら、また大問題に発展していたでしょうが、それは18年後に持ち越されること

になります*。とにかくシュタイガーの発言に対しては、68年まで次々と批判が出てくる。もっとも、いわゆる保守派の中にはよくぞいつてくれたと、賛成論を唱えるひとたちもいましたが、時代の趨勢で分が悪い。文学というものは社会のもっているひとつの、極端にいいますと一種の害悪や、あるいは歪みを摘出して、ありうべき社会がやってくるのを促進すべきであるし、またそのような力をもたねばならぬ、というように逆アンガジュマン文学論争にまで展開して行きます。これが有名な「チューリヒ文学論争」の大筋です。

* 1933 年、シュタイガーは 25 歳で親独、反民主主義的組織「国民戦線」に参加、「ノイエ・シュヴァイツァー・レントシャウ」紙にナチズム政策に賛同する「文学と国家」を寄稿。しかし、まもなく大学でのキャリアを進めるため、政治活動から離れ、文学を文学だけの領域で見るという理論を展開するようになった、ということが、96 年チューリヒ大学に受理された学位論文『ゲルマニスティクと政治。ナチズム時代のスイスの文学研究』で明らかになりました(Julian Schütt, *Germanistik und Politik. Schweizer Literaturwissenschaft in der Zeit des Nationalsozialismus*. Zürich 1996)。今回触れることのできなかった、ソンディ Peter Szondi(1929 生)はシュタイガーの弟子で、ベルリン自由大学教授になった人ですが、「論争」当時、師にその過去のことを私信で問い質していたということです。ソンディは 71 年に自殺しました。

この文学論争は文学研究の場を端的に露呈したのです。在来の文学研究のそれこそ方法が問題化されたということです。すなわち、それまでの方法や考え方では現在の文学の在り方はもはや解明できないし、その問いかけに答えることもできない。現在の文学を理解しようとするひとびとの助けにもならないし、さらに文学とは何かという根本問題への解答も保留せざるをえない。また別の見地から考えれば、フリッシュが「チューリヒのゲルマニストが威厳をもって、エッカーマンの言葉で語っていることも考

えず」と指摘したように、権威の時代、大学教授が傑作の有り難みを語って聞かせる時代が終わったことを告げているのです。

しかし、とここでまた註釈をはさまざるをえません。こうした出来事を現在から振り返って見ると、確かに推移の脈絡がたどれ、そこに必然的といえるダイナミックスが働いていたことが分かります。しかし、さまざまな事件や論議は、ある程度の時間の経過を見て、ということは歴史化して初めて一定の位置、評価が定められます。リアルタイムには、その実感というものはなかなか掴めないというのが私の強い感想です。もちろん個人の感度の違いはあるのですが、あとになれば大きな変位の予兆であったことが分かるのに、その時にはどの方向に向かって展開するのか予測はつきがたいのです。私自身、66年から68年にいわば現場ともいえるドイツにいたのに、今何が変わっているのかということは及びもつかなかったのです。従って、このことはどうしても書き残して起きたいと思います。

ミュンヘンのゲルマニスト会議のこともシュタイガーの発言も、余波はかなり時間をおいて起きました。前者は世間から見れば、学者研究者の問題で、それがどのような問題に結びついているのか、ついていくのかは関心外です。大学の中でも話題にはならなかったのです。キリーはゲッティンゲンの教授でしたが、その周辺から大変なことが起きたという声は挙がってこなかった。ですからミュンヘン学会で起きたことは、明くる年、*Germanistik - eine deutsche Wissenschaft* [edition suhrkamp 204]として出版され、週刊誌「シュピーゲル」(Nr.19-1.Mai, S.100f.)がセンセーショナルに取り上げて、初めて「あったこと」を知った始末です。これ以前にもショーナウアーの『第三帝国下のドイツ文学』(Franz Schonauer, *Deutsche Literatur im Dritten Reich*, 1961)を読み、紹介していた頭でも、不明であって、こと学問研究の分野となると過去と現在との相関関係がにわかに掴めなかったのです。また67年のベルリーンの事件も、もちろん新聞で伝えられましたが、学生の行動に共感するといったものではなかったのです。ゲッティンゲンでも一部の学生が一ほんの少数でした—デモのようなこと

をしたのですが、街の人の反応は冷たいものでした。食堂の主人などは、「学生は勉強にきているのだろう。労働者みたいな真似をすることはない」と怒っていました。人口11万、その1割が学生という古くからの大学都市のことです。ドイツでは同じ夏に「構造とは何か」というラジオ放送があった頃です。

67年の夏学期、シェーネ教授はバロック文学を上級ゼミナール(Oberseminar)のテーマにしました。今は亡いシロツキ Marian Szyrocki 氏が来ていたこともありまして。オーバーゼミナールともなると、いわば親族会議みたいなもので、シェーネ付きの助手2人(Wagenknecht—現ゲッティンゲン大学教授, Stenzel—現ブラウンシュヴァイク大学教授)に博士論文執筆予定者のみ、総数15名程度です。(研究室から招待状が来たのです。)要するに一家言一騎当千の連中だけ。欠席なんて問題外。中盤を過ぎた頃、時間外に、一人の女子学生が「文学研究方法問題検討の提案」というペーパーを配りました。主旨は、当時出たばかりのヴィントフーア Manfred Windfuhrの研究を中心において、われわれ報告者の研究法を(教授は抜かして!)分類しながら、自分の問題意識を確かめるといったことにありました。その項目に、「なぜWindfuhrの社会関連の試みは失敗したか」、バロックというような「時代概念は、社会状況をとらえる能力がなくてよいか」の問題提起が入っていました。こうした提案も、「社会」なんてことばが出てくるのも異例でした。—しかし、文学研究に社会史的な考察が欠かせないということに注目したのは、17世紀文学研究が最初に着手することになりました。あとでわかったのですが、シェーネは65/66冬学期「バロックにおける文学と社会」というゼミナールをしていたのです。—たぶん教授の了解なしに配ったのだと思います。あるいはゼミ外で討議しなかったのでしょうか。結局はだれからも反応がないままでした。ただし、それからしばらくして、何かの折りに彼女の発言に対して教授が否定的態度をとったところ、たちまちにして、激しい集中砲火が始まり、いつも活発な彼女は一言も抗弁なく終わりました。次回から彼女の姿は見

られなくなりました。しかし弟子から外されたわけでないことは、やがて70年代初め、学位論文がPalaestra叢書に入り、テーマだった作家の校訂版を出版したことで知りました。その当時のことで強く印象に残っているのは、シェーネ教授が「かつて（大物教授は）大きな理論を展開していたゲー」ということは解釈に学問的ジャルゴンをちりばめながらあれこれ理屈を盛り込んでいた、と言外に言っているのですがー、今日のわれわれはクルミ割り Nußknacker に徹しなければならない」と力を込めて言ったことです。説明は省きますが、68年のベルリン学会で過激派学生に「意味がない irrelevant」と攻撃された「ゲーテの雲形論」のようなネオ・ポジティヴィズムといわれるようになった態度が必要だと示唆したのでしょう。

60年代には以上のようにさまざまなことが起きました。ここでヤウス Hans Robert Jauß の登場ということになりますが、そのような出来事の底流をなす動向を見ますと、ヤウスの理論の内容を殊更にここであげつらうまでもなく、ここで問題となるのは、社会と歴史とそれを作り動かす人間主体、それも個々人だということは明らかです。これまでは優れた作品があつて、それを誰がどのように作ったのかが問われた。つまり偉大な詩人を中心とした生産および叙述の美学が行なわれていた。しかし今考えれば極く当たり前のことなのですが、社会が変わればそこに求められる作品の内容も形態も違ってくる。すなわち、誰が、いつ、どのように、どのような立場から、どのようなテキストを読み理解していくのか。これが時代的に文学研究に要求されてきた視点でありました。

そこに行き着くまでには、60年代後半にじつに多様な問題提起が行われるようになり、いわゆる「方法の多元論 Methodenpluralismus」の時期を迎えた、まさに過渡期があります。そこにはドイツ民主共和国 DDR の研究に対抗する動因もありました。

ヤウスはそういう意味で非常にアンテナの感度が良かったといえます。その感度の良さは彼がドイツ文学研究者ではなかったからでもあります。

ヤウスはロマニストです。フランス文学の歴史を見ると直ぐ分かりますように、この国での文学の生産は読み手、あるいはその前に聞き手と密接に結びついています。宮廷における婦人部屋、さらに市民の化粧部屋ブードワール、そしてサロンというように文学の生産の一契機に必ずその受け手が加わった場がありました。そのような文学の歴史を見ていた学者がヤウスであった。それに彼以前にすでに今世紀の前半に、フランスではアルベール・チボーデが『小説の美学』において、読者の役割について言及しています。ヤウスの問題は、テキストに対する読者の立場ないし役割をいかにして理論化するかということにありましたが、またそれを現実の歴史の局面において適用するための方法が求められもしたのです。

ここでその理論的支柱になったのが、60年代に再びドイツに戻ってきた知識社会学とか批判理論、そしてそこから生じた社会科学方法論論争での問題、さらに哲学的解釈学が一方にあり、他方では、ルカーチの文学論、そして1920年代から30年代にかけて進展しながら沈黙を命じられたロシア・フォルマリズム、そしてそれを発展的に継承して形成されたチェコのプラーク派構造主義が丁度再建され始めていました。そうした在来は注目されていなかった研究分野を掘り起こしたのは、ヤウスのコンスタンツにおける同僚たち、いわゆるコンスタンツ学派 Konstanzer Schule でした。なにしろ、フランス構造主義でさえ、67年になってやっとドイツに紹介され始めたのです。そうしたさまざまな領域の知恵を土台にして読者の文学史の構想を行なったのが、受容理論です。

表題通り、受容理論が生まれるところまでお話ししてきたのですが、まだまだ途中経過で重要なポイントが抜け落ちています。それらを補っていくためにはかなりの紙数が必要です。不十分を承知で、終わりとします。

本稿で扱った期間で起きていたことでは、このほかSchneider/Schwerte事件やヤウスの武装親衛隊問題にも触れるべきだったのですが、あまりに紙数を使うことになるので、今回は見送りました。いずれ折を見て、この

問題も考えてみたいと思っています。

参考文献

Herrmann Glaser, *Die Kulturgeschichte der Bundesrepublik Deutschland*. Bd.2:
Zwischen Grundgesetz und Großer Koalition 1949-1967 Fischer Taschenbuch
Verlag 1990

Jost Hermand, *Geschichte der Germanistik*. rowohlts enzyklopädie 1994

Benno von Wiese, *Ich erzähle mein Leben. Erinnerungen*. FftM 1982

なおドイツ文学におけるカノン形成については「學鐙」（1997,9/10 月）
所載の「ドイツでおきた「カノン論争」——変革の六七・八年から三〇年
たった文化状況」を参照して下さい。

（ドイツ文学科 教授）